



あけましておめでとうございます。本年もどうぞよろしくお願ひ申し上げます。  
今年の干支は虎です！干支は身近な動物が多いのですが猫ではなく虎なのはどうしてでしょうね。  
今回は、お正月の特別展として「博物館のお正月2022～開館20周年Yearの幕開け～」を紹介します。  
虎の標本の展示もありますので、皆さんぜひ、ご来場ください。ご来館を心より、お待ちしております。

## 「博物館のお正月2022～開館20周年Yearの幕開け～」

会期：令和4年1月2日(日)～令和4年1月31日(月)

観覧料：常設展入場券で観覧可(大人600円、高大生360円、小中学生240円)

北九州市で活躍した画家 藤井玉欄(明治5年～昭和22年)の「虎図」など、  
虎にまつわる歴史的資料や、縁起がよいとされる鶴や亀、七福神に関する資料  
などを展示しています。

新年早々にご利益があるかも!!

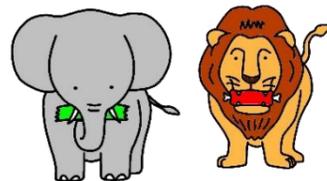


藤井玉欄「虎図」

僕の企画展示だよ!!



僕らの企画展示ではないよ。  
虎くんがうらやましいな。



紅白模様のへびに虎模様のサンショウウオだ。縁起がいいな。



「虎」のはく製



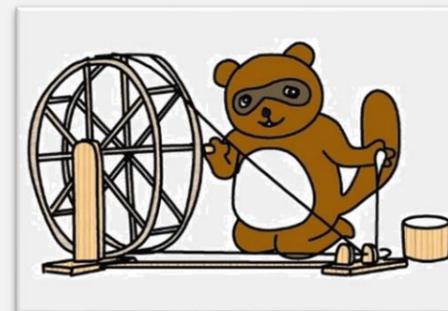
# ミュージアムのタネ

## 糸をつむぐ糸車

※文中の『たぬきの糸車』は市内小学校1年生の教科書に掲載されています。

キーカラカラ キーカラカラ  
キークルクル キークルクル

この音は『たぬきの糸車』の物語の中で、糸車をまわして糸をつむぐ音として表現されています。糸車は、ハンドルの付いた「車」と「つむ(糸を巻き取る棒)」とをひもでつないだ構造で、ハンドルを回すと「つむ」も回る仕組みになっています。



糸の材料は主にワタで、オクラに似た花が咲いた後、実がふくらみ、割れると中からふわふわのワタが出てきます。このワタのせんいをきれいに整え、細くのばし、より合わせて(ねじってあわせること)糸にします。カイコの幼虫がさなぎになる時に作る「まゆ」や、あさなどの植物のせんいをより合わせる時も、糸車を使います。

ワタを糸にする場合は、まず右手でハンドルを回しながら、左手でワタのせんいを引き出します。次に糸の先を指で押さえ、さらにハンドルを回してよりをかけます。最後にてきた糸を「つむ」に巻き取り、最初にもどってくり返します。右手と左手は違う動きをしなければならないため、最初はなかなかうまくできず、すぐに糸が切れてしまいます。たぬきが上手に糸をつむぐことができたのは、毎晩おかみさんが糸車を回す真似をくり返していたからでしょうね。

さて、『たぬきの糸車』の物語の中で糸車を回す音は「キーカラカラ」「キークルクル」と表現されていますが、実は糸車を回してみると「ブーンブーン」という別の音が聞こえてきます。この音は糸によりをかける時の音で、勢いよく車を回すと車と「つむ」をつなぐ紐が鳴っているようです。明治時代に活躍した作家で小倉にも滞在したことのある森鷗外(1862～1922)は、『鶏』という作品のなかで、糸車が「ぶうんぶうん」と鳴っている、と表現しています。今は、機械でつむいだぼう績糸を使うようになったため、糸車の音を聞くことはほとんどなくなってしまいました。



ワタの実がはじけた様子

江戸時代から小倉地域で織られていた「小倉織」という織物は、ワタの糸をつむいで織られたものです。

歴史課学芸員 上野 晶子